重力実験のためのウニの幼生骨格系間充織の培養の検討

お茶大 清本正人 宇宙研 黒谷明美 東大 江口星雄 お茶大 山口守

The culture condition of larval skeletogenic mesenchyme cell for the gravity experiment Masato Kiyomoto, Akemi Izum-Kurotani, Hoshio Eguchi, Mamoru Yamaguchi Marine and Coastal Research Center, Ochanomizu University Kouyatsu, Tateyama, Chiba 294-0034

E-Mail: kiyomoto.masato@ocha.ac.jp

Abstract: Sea urchin and other echinoderm animals have calcitic endoskeleton. In sea urchin embryo, skeletogenesis starts at late gastrula stage and then the spicules grow up to larval skeletons. The skeletogenic cells are called primary mesenchyme cells derived from micromeres at 16-cell stage. We already reported a promotive effect of hypergravity on skeletogenesis in the culture of the skeletogenic cells with low concentration of horse serum. For the culture of skeletogenic cells, micromeres isolated by sucrose gradient are used. In this study, we examined more simple method to isolate skeletogenic cells. In calcium deficient seawater, embryos developed without cell adhesion and failed to form blastura. At the time of hatching, most cells were dispersed but mesenchyme cells left on the bottom were used for the culture. These mesenchyme sometimes contained not only skeletogenic cells but also secondary mesenchyme cells. This isolation method is simple and possibly is useful to improve a procedure of the gravity experiment.

Key words; skeletogenic cells, sea urchin, horse serum, calcium, hypergravity

ウニを含む棘皮動物は炭酸カルシウムからなる 内骨格を持つ。ウニの幼生の骨片(幼生骨格)は、 16 細胞期の小割球に由来する一次間充繊細胞によ って形成される。骨片細胞だけを培養することが可 能であり(Okazaki, 1975; Kiyomoto & Tsukahara, 1991)、無脊椎動物の生物石灰化(バイオミネラリ ゼーション)のモデルとして、各種重力環境の及ぼ す影響がこのウニ小割球の培養系を使って調べら れている。これまでに、過重力環境により形成され る骨片の数が増加すること、骨片形成に関わる過程 の中で Ca²⁺の取り込みに過重力が影響している可 能性、骨片基質タンパク質の発現に過重力は影響し ていない事が報告された(Imai *et al*, 2006; Kiyomoto *et al*, 2007)。

骨片細胞を単離するための操作は、ショ糖密度勾 配を使う方法(Kitajima & Okazaki 1980, Kitajima & Matsuda 1982)や細胞の接着性の違いを利用する方 法(Katow & Hayashi 1985, Ettensohn & McClay 1987)などがあるが、いずれも煩雑である。重力実 験の手順をより簡便にするために、少ない手順で簡 単に単離できないか、カルシウム欠如海水を使って 検討した。

【材料と方法】

実験にはバフンウニ Hemicentrotus purcherrimus

を使用した。10mM塩化アセチルコリンもしくは0.5 M KCl を割腔内に注射し配偶子を採取した。受精 卵はカルシウム欠如海水中で発生させた。発生の過 程は、倒立顕微鏡に取り付けたタイムラプスビデオ で撮影した。間充織細胞の培養には、濾過滅菌した 海水に抗生物質と馬血清を加えた海水を使用した。 培養した間充織細胞の抗体染色では、10%ホルマ リン海水で固定後、海水で洗ってから、一次間充織 細胞に特異的なモノクローナル抗体 P4 と FITC で 標識した2次抗体を使って染色した。

【結果と考察】

受精卵をカルシウム欠如海水中で培養すると、卵 割は進行するが、細胞間の接着ができないために、 胞胚の形をとることができず、解離した状態の細胞 が増えていった。受精後12時間の正常胚がふ化す る頃には、受精膜が破れたので、ふ化酵素の分泌は 正常なタイミングで起こるようである。受精膜が破 れることで、中の細胞は外に流れだし、そのほとん どはシャーレの底に広がって散らばった。一部の細 胞は塊をつくり、シャーレの底に張り付いた。解離 して広がった細胞は、遊離したままなので、ピペッ トで新しいカルシウム欠如海水を静かに吹き付け ると、洗い流されるのに対し、細胞の塊は底に張り 付いたまま残った(Fig.1)。この塊を作る細胞は、 その後シャーレの底を遊走した。その形態や挙動か ら間充織細胞と考えられる。胞胚壁を構成する細胞 の形態形成には、細胞接着が必須であり、細胞接着 にはカルシウムイオンが必要である。一方で、胞胚 壁から卵割腔内へと移入する間充織細胞は、その細 胞機能の維持にカルシウムイオンは不要のようで、 カルシウム欠如海水中でも時間通りに発生するよ うである。



Fig.1 Isolated mesenchyme cells after the culture in calcium deficient seawater. Dissociated cells were removed by gentle stream and only attached mesenchyme cells were left.

この細胞塊を馬血清を含む海水で培養すると、一 部の細胞は骨片を形成した。しかし、骨片細胞(一 次間充織細胞)だけでなく、色素細胞や割腔細胞と いった二次間充織細胞も現れた。細胞塊の細胞が遊 走したところを、骨片細胞に特異的な抗体で染色し たところ、ほとんどが骨片細胞の場合と(Fig.2)、多 くの染色されない細胞を含む場合があった。宇宙実 験のために使う骨片細胞の単離培養の観点からは、 できるだけ二次間充織細胞を含まないように細胞 を単離できた方が良い。原腸陥入に先立って卵割腔 に移入する一次間充織細胞(骨片細胞)に対して、 非骨性の二次間充織細胞は原腸胚期に出現する。解 離細胞を洗い流す操作を、二次間充織細胞が出現す るよりも前の時期に行うことで、一次間充織細胞の 純度をあげることができるかもしれない。

カルシウム欠如海水中での胚の培養により間充 織細胞を単離するこの方法は、従来のショ糖密度勾 配や細胞の接着性の違いを使った方法にくらべ、簡 便な操作で間充織細胞を単離でき、その培養により 骨片形成を観察することができた。骨片細胞の純度 をあげることにより、重力実験のための細胞の調整 方法として有効なものになると考えられる。



Fig.2 Most of isolated mesenchyme cells were stained by skeletogenic cell specific antibody. Some non-specific cells were secondary mesenchyme cells.

参照文献

- Ettensohn CA and McClay DR, A new method for isolating primary mesenchyme cells of the sea urchin embryo. Exp. Cell Res., 168, pp. 431-438 (1987)
- 2) Imai M, Izumi-Kurotani A, Eguchi H, Yamaguchi M and Kiyomoto M,, The effect of hypergrabity on the spicule formation in the culture of sea urchin micromeres and embryos. Space Utilization Research 22, pp. 238-240 (2006)
- 3) Katow H and Hayashi M, Role of fibronectin in primary mesenchyme cell migration in the sea urchin, J. Cell Biol., 101, pp. 1487-1491 (1985)
- Kitajima T and Okazaki K, Spicule formation in vitro by the descendants of precocious micromere formed at the 8-cell stage of sea urchin embryo. Develop. Growth Differ., 22, pp. 265-279 (1980)
- 5) Kitajima T and Matsuda R, Specific protein synthesis of sea urchin micromeres during differentiation. Zool. Mag., 91, pp. 200-205 (1982)
- Kiyomoto M, Izumi-Kurotani A, Eguchi H, Yamaguchi M,, The effect of hypergrabity on the spicule formation in the sea urchin development. Space Utilization Research 23, pp. 332-334 (2007)
- 7) Kiyomoto M and Tsukahara J, Spicule formation-inducing substance in sea urchin embryo. Develop. Growth Differ., 33, pp. 443-450 (1991).
- 8) Okazaki K, Spicule formation by isolated micromeres of the sea urchin embryo. Amer. Zool., 15, pp. 567-581 (1975)